

## 今週のメニュー

### [トピックス](#)

大成建設（株）エコモデル・プロジェクトの取組み

### [随想](#)

塩化ビニル管・継手の歴史（6）

塩化ビニル管・継手協会 総務部長 石崎 光一

### [編集後記](#)

## トピックス

### 大成建設（株）エコモデル・プロジェクトの取組み

大成建設（株）では、東京都千代田区で建築中の「平河町二丁目再開発」において、エコモデル・プロジェクトとして、ゼロエミッションに取り組んでおられます。

新築現場で発生する廃棄物の徹底した分別や、再資源化が難しいとされる混合廃棄物の大幅な削減と再資源化の推進等により、埋立処分される建設廃棄物の排出量ゼロを目指し、現在、リサイクル率99.4%を達成中です。新築工事現場を訪問し、如何に取り組んでこられたかを実際に目にしてきましたのでご紹介します。

廃棄物は、軍手、作業服等の一般廃棄物11品目とコンクリートがら、金属くず、木くず及び廃プラスチック等の産業廃棄物を54品目、合計で65品目に分別されています。特に材質がまちまちで、製品数の多い廃プラスチックはタイルカーペット、壁紙クロス、塩ビコーナー材、電線被覆、パイプ（硬質・軟質・エフレックス管）ほか17品目にも分けられていました。これらは、圧縮機や溶剤等で「破碎・圧縮・溶解」等により徹底した減容化の上、再資源化施設に運搬され、マテリアルリサイクル（材料再利用）、ケミカルリサイクル（化学原料化）、サーマルリサイクル（エネルギー・熱回収）等の最適なりサイクルが行われています。



ゼロエミッションへの取組み(分別ヤードの状況写真)

今回のエコモデル・プロジェクトは、建築及び土木の施設・構造物の建設等を通じて良質な社会資本のストック形成に貢献するという環境方針の下に、発足したそうですが、実際の取組みには非常に苦労された様です。本プロジェクトの環境担当の方によると、現場の専門工事業者並びにその作業員全体の意識革命と協力によって、非常に高いレベルの取組みが出来たことに本プロジェクトの意味があるとのこと。実際に、作業員の意識を高めるためには元請の指導の下、職長会（作業員リーダーの組織）が中心となって、環境分科会を立ち上げ、パトロールを定期的に行ったり、全員参加の分別大会や中間処理施設見学会を実施するなど、具体的活動と見識を高める自己啓発の機会を設け、様々な取組みがなされたとのこと。

見学時にも、作業員が分別したリユース品（PPバンドやシート類、紐類など）を廃棄物置場（分別ヤード）まで取りに来て再利用している姿に直面し、作業員の意識が高まっているところを拝見することが出来ました。また、現場のスペース（分別ヤードの確保）が必要で、どこでも実施出来るわけにはいきませんが、本取組みが多く建設現場で広がって行く事が期待されます。（了）

## 随想

### 塩化ビニル管・継手の歴史（6）

塩化ビニル管・継手協会 総務部長 石崎 光一

シリーズも第6回目と終わりに近づきましたが、今回は塩化ビニル管のリサイクルシステム構築の状況を紹介します。

#### 3) リサイクル

この10年、協会が総力を挙げて築き上げてきたのがリサイクル活動です。リサイクルは資源の有効利用と廃棄物対策という国策に沿った、塩ビ管業界としての社会的使命を果たす活動ですが、塩ビ管の環境適合性や協会の環境重視の姿勢を積極的にアピールできる活動でもありました。塩ビ管のリサイクルシステムは、塩ビ管に対するユーザーの支持を繋ぐと共に営業第一線にとっての支えにもなりました。

残材発生量調査に続いて、協会では微粉碎技術の開発、リサイクル三層管試作テスト、OAフロア試作テストなど使用済み塩ビ管の再生利用技術の開発に取り組んできましたが、平成9年（1997年）リサイクル開始に向けてリサイクルプロジェクトを設置し、全国の塩ビ回収再生会社を調べてリストアップしました。また、すでにリサイクルが実施されているドイツ、オランダに調査団を派遣して詳しく実情を調べました。その結果、日本では各地に有力な再生会社があり、すべて新規に準備するよりも、これらの会社と提携したリサイクルシステムを構築した方が早く、かつ有効なリサイクルが実行できるとの判断に達しました。そして、訪問調査等を経て選定した10社と協力会社契約を結び、平成10年（1998年）12月にプレス発表を行い、全国リサイクルを開始しました。

その後、平成11年(1999年)にはREP管(リサイクル材を主体とした単層構成の管)の協会規格AS58を制定し、また、リサイクルパンフレット、ビデオを制作して行政やユーザー団体等にリサイクルのPR活動を行いました。さらに平成12年(2000年)にはリサイクル発泡三層管の協会規格AS59の制定や、協力会社まで遠くてリサイクルを利用できないとの声に対応するため中間受入場の設置を進めました。平成13年(2001年)にはリサイクル三層管の協会規格AS62も制定しました。

この年の下期には経済産業省の支援事業として新潟県水道工事業協同組合連合会のご協力のもとに実施した、中間受入場を核とするモデルリサイクルでは、リサイクルの色々なノウハウが得られました。中間受入場の選定、県廃棄物対策課への説明、県管工事組合への説明、組合員への説明会開催と進め、仕上げの受入場開所式は組合員の一齐持込日にして頂き、予め通知しておいた地区のテレビ局、新聞の取材を受けました。塩ビ管リサイクル開始のニュースは当日のテレビや新聞に報道されました。一年余りの期間に、これを協力会社のない32県で順次実施しました。

平成13年(2001年)春にスタートした一貫リサイクルシステムは、世界トップ水準の本格システムとプレス発表したとおり、塩ビ管リサイクルにとって画期的な前進でありました。これによって、従来協力会社での受入だけだったものが、協会が設置した中間受入場で受入れ、これを協会が協力会社まで運搬し、さらに協力会社で作った粉碎原料を協会が購入し、この原料を使った再生管を協会会員会社が販売するという、協会が一貫してリサイクルに直接関わるという体制が確立することになり、この仕組みと実績が評価されて平成15年(2003年)2月のリサイクル塩ビ管のグリーン購入法特定調達品目追加や東京都等の自治体および都市公団の仕様記載へと繋がることになりました。

当協会は排出者のニーズに応じて、リサイクル拡充システム(協会がパンフレット等で紹介する契約中間処理会社が、適正な料金で未処理の使用済み材を受入れる仕組み)を平成15年(2003年)12月、従来のシステムに付加するものとして開始しています。(続く)



リサイクルのPR活動のため  
作成したパンフレット



すっかり定着した  
管・継手リサイクルシステム

前回の塩化ビニル管・継手の歴史(5)は、下記からご覧頂けます。

[http://www.vec.gr.jp/mag/237/mag\\_237.pdf](http://www.vec.gr.jp/mag/237/mag_237.pdf)

## 編集後記

このたびの政権交代で、高速道路の無料化が始まるかもしれないと話題になっているところですが、この夏、景気対策として始まった高速道路の「土曜日曜、1000円乗り放題」を利用し、これにまでない渋滞を経験してしまいました。今週末は、秋のゴールデンウィークです。秋晴れの中、車でお出かけの方もいらっしゃるかと思います。春のゴールデンウィークに負けない渋滞が予想されているようです。覚悟を決めて出かけるようですね。

連休に合わせ、このメルマガも来週はお休みします。(HI)

## 関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

---

---